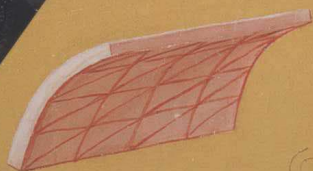


島田雅彦

fukutake bunko L010
shimada
masahiko

優しいサヨク
のための
嬉遊曲



福武文庫
L0101

優しいサヨクのための嬉遊曲

1985年11月15日 第1刷発行
1990年11月20日 第11刷発行

しまだ まさひこ
著者——島田雅彦

発行者——福武總一郎

発行所——株式会社福武書店
東京都千代田区九段南2-3-28
〒102 電話(03)230-2131
振替口座(東京)6-105097

印刷所——大日本印刷 製本所——加藤製本
装丁——菊地信義

©Masahiko Shimada 1985
Printed in Japan

落・乱丁本はお取替え致します
定価はカバーに表示してあります
ISBN4-8288-2170-8 C0193

福武文庫

優しいサヨクのための嬉遊曲

島田雅彦

福武書店

目次

優しいサヨクのための嬉遊曲
カプセルの中の桃太郎

解説 加藤典

優しいサヨクのための嬉遊曲

優しいサヨクのための嬉遊曲

一、千鳥足の恋

待ち伏せは四日目に入った。オーケストラ団員である彼女はもうすぐ、この場所に現れるはずだった。練習を終えた彼女はまっすぐ家に帰るため五時にここを通る計算になる。

待ち伏せは精神衛生上よくない。もう四日目になると失踪しつそうした妻を探す夫の姿に似てくる。千鳥姫彦は今朝、鏡を見てそう思った。

かつて、千鳥は彼女と五秒間、視線を結び合った。彼女は向いのベンチに坐って空気を見ていた。彼は本のページに固定していた目をたまたま彼女の方へ向けた。遊んでいた彼女の目も照準を彼に向けた。この五秒間は夫婦生活に匹敵ひつてきするほどの意味を持っていた。六秒目には離婚してしまったのだが。

千鳥は五秒間の夫婦生活の憶い出にひたるようになった。再び夫婦になりたいと思つた。

夜、一人で自室のベッドに腰かけ、鍵のかかったアルミサッシの窓を見ていると彼女の顔が思い浮んできた。記憶の中の彼女の像は少しぼやけていたが目と唇は強調されていた。

千鳥の部屋の窓は厚い曇りガラスで、窓の向こう側には黒いアルミ格子が入っていた。外からこの部屋をのぞくと、彼は幽閉者でもあるかの如く見えるかもしれない。いや、彼は現にこのベッドタウンのマンションにあっては幽閉者だった。看守も訪問者もいなかった。誰も彼の部屋をのぞかなかった。しかし、幽閉者はのぞかれたかった。たとえば彼女に。

彼は窓を開けた。アルミ格子の向うに彼女が立っている情景を想像した。「こんにちは」「やあ、会いに来てくれたのかい」「そう」「有難う、チョコレートでも食べるかい」「うん」二人は窓越しに見つめ合う。

千鳥は彼女に同族意識のようなものを抱いた。似たような環境にいるのではない

か、彼女も幽閉者なのではないか、兄妹のような絆が二人の間にあるのではないかと。ひよっとしたら、彼女は父の隠し子ではないのかという期待まで抱いた。近親相姦という神話の世界で遊べるかもしれないと。

誰でも夜中、ベッドにいる時は思考の原野を駆けめぐるものだ。

千鳥は高校を卒業する頃、はじめて少女漫画の雑誌を手にした。近親相姦をテーマにした異色のドラマのヒロインに魅かれ、以後連載が終るまで読み続けた。ドラマの舞台はフランス革命前夜。地下革命組織の幹部である兄と兄の心の支えとなっている妹はパン屋の屋根裏部屋に二人きりで暮っていた。警官が発砲した弾丸を受けた兄は血まみれになって部屋へ戻ってくる。妹は兄の傷の手あてをし添寝して兄を守る。ある日、妹が食物を探しに出かけるが、警察に拉致され幽閉されてしまう。傷も癒えぬうちに兄は妹を救い出そうとする。しかし捕えられ、地下牢にぶち込まれる。そこには妹もいた。二人は抱き合い、結ばれる。千鳥は自らこの兄の役になった。

千鳥はもう十五分待ち伏せを続けていた。彼女が現れるまでの秒読みが始まっ

た。

待ち伏せ初日もきのうも彼女は同じ頃ここを通ったのだが、素通りしてもらった。初日は門の陰で彼女の容姿を点検するための待ち伏せだった。きのうは自分の顔を憶い出させるためだった。そして、きょうは……。

彼女は一人で、バイオリンケースを提げて歩いてきた。水色のワンピースが風で波打っていた。長い首、あまり豊かではないが抽象彫刻のような胸、珊瑚色さんどの唇が接近してくる。遂に彼女は千鳥の攻撃半径の中に入った。彼はシナリオ通りにセリフをいうため思考を中断して、彼女に襲いかかっていった。

「こんにちは」

「えっ——こんにちは」

「お帰りですか」

「ええ」

「御一緒しようと思って待ってました」

「ずっと？　ここで？　どうしてですか」

千鳥は鏡を見ながら訓練した笑顔をつくって答えた。

「お話がしたいんですよ。僕の顔ぐらいいは知ってますね」

「はい、何度か拝見しましたけど」

「僕は千鳥姫彦です」と名のると、四分休符を置いた。「で、あなたは？」

「名前ですか、逢瀬みどりです」

「みどりさん、じゃあ行きましようか、みどりさん」

「何処へ」

「帰るんでしょ」

「ええ」

みどりの髪の匂いがした。茶色の瞳、白い肌、顔には余計なものは一切なかった。型を取りはずしたばかりの石膏像せつこうのような〈顔のエッセンス〉だった。

「今後あなたにつきまとわせてもらいますからよろしくね」そしてあの文法通りの笑み。「迷惑じゃないですね」

「いきなりいわれても……。なぜですか」

「その理由は話せば長くなります。今、話してもいいけど、それより喉が乾きましたね。コーヒーを飲むのに三十分くらいかかりますが、どうですか？」

新興住宅地のベッド村に稼かせぎ人たちが帰ってきた。千鳥は仮面ではない笑顔になって帰ってきた。逢瀬みどりの顔や声を反芻はんすうしながら。時々、「みどり」と名が口から漏れた。

その日、みどりから聞き出したことは殆ど全て千鳥の記憶に入った。彼女は妹ではなかったが妹的な女の子だった。恋をしたことがないといった。ということは処女なのであった。千鳥は自室でベッドに腰かけ、窓を見ながら決心した。彼女を救出してやろうと。彼女に感じた同族意識は当を得たものだった。二人とも幽閉者だったのだ。彼女は父親の監視のもとで自由を奪われているに違いなかった。

彼女の父親は千鳥の仮想恋敵となった。

何日か経って、千鳥は再び彼女に会った。火曜日に図書館のロビーで。

「毎週ここに来てほしいね。つまり火曜の午後四時には図書館にさ」

「来れない日もあると思う」

「だろうな。来れる日は」

「来てもいいわよ」

「嬉しいね」

（さてと千鳥は考えた）（どういうふうに話そうか）（どういうふうにさわろうか）

（どういうふうに……）

門を出て右へ行くか左へ行くか迷った。右へ行けば駅、左は墓地だった。左を選んだ。

みどりは空気を見ていた。空気の微妙な色彩を調べているようだった。試しに「何見てるの」と聞いてみた。

「何も見てない。見えるけど見てないの」

「世間にあつて世間から遠ざかつてるわけだ。君のまわりには隔膜があるのか」

「そう」

「その中に入れてくれませんか」

「もう入ってるじゃない」

「そうなの？」

墓地の入口では、顔からして躁状態の少女が一人芝居をしていた。少女とその分身の二人はボソボソと会話していた。会話の中身は聞きとれなかったが、その二人の関係は母と娘であるようだった。そこへ男女二人連れの訪問者が現れたので、少女は別の芝居に切替えた。

「ここから先に行くとお化けが出るよ」といつてから相手の表情を窺い、^{うかが}「女と男と二人で歩いてるとお化けに襲われるんだよ」と続けた。

「どんなお化けだい」千鳥は口先で素氣^{そけ}なく尋ねた。

「いつもお酒飲んでね、くさいの、それでこんなに大きいの」少女は腕を高く揚げて跳び上った。

七、八歳の子にしては声が太い。そのおかつぱの女優には色気があった。子供という中性の人間特有の、よだれが酸化した匂いがかすかに漂ってきた。その匂いは